

Title	アメリカにおけるヴォランタリー・アソシエーション : アジア系アメリカ人組織の事例研究(1)
Author(s)	柴田, 史子
Citation	聖学院大学論叢, 11(3): 103-117
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=573
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

アメリカにおけるヴォランタリー・アソシエーション

—アジア系アメリカ人組織の事例研究(1)—

柴田史子

Voluntary Associations in the United States

— Case of the Asian American Organizations (1) —

Fumiko SHIBATA

The purpose of my research is to understand how an ethnic group functions as a mediating structure between the grassroots and the society at large in the contemporary American society, and this paper is its introduction. The Asian American organizations will be the object of my research.

Although they are different from each other in their nationality, culture, length of the group existence in the United States, etc., people of Asian descent have been lumped and discriminated against or attacked. I tried to show the nature of this lumping referring to the discussions on ethnicity and race.

Since each Asian ethnic group is too small to be heard and exercise its power in American society, it has to coalesce and participate in the larger society as a group, but it is willing to unite only when its interest is promoted. This constrains the nature of the coalition. While the pan-Asian organizations have been successful in gaining better recognition in American society so far, some structural changes since the 1960s challenge them.

I はじめに

アレクシス・ド・トクヴィルは、1830年代のアメリカ合衆国を観察して、アメリカの民主主義が無数のヴォランタリー・アソシエーションに支えられていることを指摘している。しかし、合衆国憲法も、それに基づいて設立された諸制度も、自由で自律的な市民が、己の信ずるところにしたがって、公平無私の心で意思決定過程に参加することを保障することを主眼とし、集団は、そのような市民が、その権利を行使することを阻害するものとして、むしろ懐疑の目を向けられている⁽¹⁾。

Key words; American society, Ethnicity and Race, Voluntary Associations, Asian Americans, Social Movements

それにもかかわらず、アメリカでヴォランタリー・アソシエーションが開花したのは、なぜであろうか。個人の権利と自由のために命をかけた者たちが、なぜ、それらを制限する集団に参加することを選ぶのだろうか。また、社会が、集団の結成を抑制するために圧力を加えなかったのはなぜだろうか。

ヨーロッパのような社会制度も無く、伝統的権威に根差した支配者も存在しない開拓地では、開拓民は自己の裁量と責任において、生活をたてることを迫られる。家を建てること、農業用水を引くこと、外敵から身を守ること、など、一人ないしは一家族の力を越えるような必要が起きてきた時には、権威や権力によってではなく、互いの合意によって力を合わせる以外には方法はなかった。そのような状況での協力は、双方を利するようなものでなければならず、そうしたことの積み重ねから形成される集団は、参加者の利益を増す性質を持つことが期待されることになる。

独立革命を推進したグループをとっても、その多くがイギリスの支配によって経済的利益を侵害された有産階級の者から構成されるものであり、また、合衆国憲法の批准のために尽力したジェームズ・マディソンが、国民の説得に使った手段も、憲法批准がいかに個々の利益になるかを指摘するというものであった。マディソン自身は、公平無私な、自律的な市民による民主主義を信奉していたが、社会が必ずしもそのような市民からのみ成っているわけではないという現実を直視し、私利私欲を持つという人間の性質を否定したり、私利私欲に基づく集団（派閥）を弾圧することを考える代わりに、私利私欲に基づく人間の行為の総和が、全体として善へ向かうようにする機構を考えている⁽²⁾。

つまり、アメリカ社会においては、集団は、旧世界で為政者が権力を用いて行ってきたことを自分達で行うために結成され、個人の利益を増進する限りにおいて、正当性を認められるものとして存在してきたのである。言い換えるならば、アメリカ社会で開花したヴォランタリー・アソシエーション⁽³⁾は、個人の自由と権利と利益を増進するために、その声を集め、全体社会に耳を傾けさせ、同じ要求を持つ者を更に集めて、その要求を実現していくための機構であり、その意味で、草の根の意思を支配体制に伝える媒介機構として働いてきたのである。そして、全体社会は、そのような集団の存在によって、草の根のニーズを知り、それに応えることによって、人々の同意を得てきたのである。

今日の「アジア系アメリカ人」の組織（汎アジア組織）は、その構成の複雑さから、そうしたヴォランタリー・アソシエーションのあり方を保持しなければならないという挑戦を受けている代表的な組織であると考えられる。本稿では、そうしたアジア系アメリカ人の組織が、いかにその下位集団（各エスニック集団）とそのメンバーを組織に動員し、忠誠心を確保していくか、各下位集団がいかにその独自性を保持し、集団としての要求を達成していくか、集団を構成する個人がどのようなアイデンティティを持つかといったことを探る第一歩として、アメリカにおけるヴォランタリー・アソシエーションの歴史の中にエスニック集団を位置づけると共に、最近のエスニシティに関

する議論の中にアジア系エスニック集団に関する議論を位置づけることを目指す。

Ⅱ アメリカにおけるヴォランタリー・アソシエーションの展開

アメリカにおいて最初にヴォランタリー・アソシエーションが登場したのは、宗教の領域であると考えられる。後世、形成されたシェーカーやオネイダなどの宗教共同体をヴォランタリー・アソシエーションとみなすならば、ピルグリム・ファーザーズが建てたピューリタン共同体も初期には、ヴォランタリー・アソシエーションであったとも言える。信仰の自由な実践を求めた者たちは、同じ信仰を持つ者たちと共に荒野に入って新たな共同体を建設したり、ニューイングランドと南部の公認教会制度の中で、政府の支援を受けることなく自分達の献金によって教会を運営する。宗教集団のこの形は、大覚醒運動以降の教会出席の流動化によって、アメリカのプロテスタント教会全体に浸透するが、教会にとって信者の獲得は教会運営上の最大関心事の1つとなり、各教会は、信者の獲得のために、彼らのニーズに敏感に対応することを迫られたのである。そのため、教会は、民族、人種、階級などの区分によって分裂することにもなったのである⁽⁴⁾。

18世紀半ば頃から、世俗的な領域でもヴォランタリー・アソシエーションの数が増していく。人口の増大による住民のニーズの多様化と、コミュニケーション手段の発展によるところが大きいと考えられるが、この時期のものは、地方レベルの、同業者の社交クラブや、青年教育団体、消防団など市民生活に密着したものが中心である。

独立革命では、地方レベルの組織が母体となり、イギリスの支配に対して利害の一致した組織が提携をしていく。この独立革命と建国の時期に、人々は、自己の利益が政治闘争によって拡大されることを知り、それが政党結成への道を開くことになった。

さらに、集団の力によって社会に影響を及ぼすという体験の中から、社会改良のための組織が、宗教組織の中からも、世俗的な領域からも誕生し、奴隷解放運動に大きな貢献をすることになる。

こうして、19世紀の半ばまでに、アメリカ社会のあらゆる分野にヴォランタリー・アソシエーションが浸透したが、今日、「エスニック集団」として言及される移民達は、このようなアメリカ社会に渡ってきて、生活を始めることになったのである。

Ⅲ エスニック集団とそれをめぐる議論

A 移民集団からエスニック集団へ

合衆国は、先住民を除けば、すべて移民または移民の子孫から成る国であると言えるが、ここでは、受け入れ社会の無い所へ移り住んでそこに社会を建設した者と、すでに社会制度が確立された所へ移住して、既存の社会への適応を迫られた者を区別して、後者を移民と考えていく。

また、自由意志でアメリカに渡ってきた者のみを考察の対象とする。

アメリカへの移民の波は、1830年代から40年代にかけての時期と、1880年代から20世紀初頭にかけての時期の2つに大きく分けられる。前者の中心は、ドイツ系、アイルランド系であり、後者は、東欧、南欧、アジアからの移民を中心とする。短い期間に特定のグループが大量に流入する場合、それがどのようなグループであろうと、受け入れ社会は政治、経済、社会構造の変化を余儀なくされ、そのことが、既存の体制に既得権を持つ者たちの抵抗を生んできた。

特に、19世紀末から20世紀初頭に流入した移民達の場合、明らかに容貌が異なること、宗教が異なること（カトリック、ギリシア正教、ユダヤ教、東洋宗教、無神論など）、フロンティアの消滅により農村に分散するよりも鉱工業の中心地に集まり住んだために、実際よりもはるかに数が多いような印象を与えたこと、概して大家族で狭いところに密集して住んだために、伝染病や火事の発生源になることが少なくなかったことなどが、安価な労働力を提供し、盛んになり始めた労働運動の障害になったことと相俟って、移民制限論や移民排斥運動を巻き起こしている。

どのような時期に渡ってきたにしろ、移民達は、様々な必要から結束する。それは、宗教的実践のためであったり、反移民感情から起こる暴力に対する自衛のためであったり、相互扶助のためであったり、若者の教育のためであったり、さらに、去って来た郷土を支援するためであったりする。この移民第一世代、すなわち一世の結びつきは、多くの場合、国籍のような包括的なものよりも郡や県などの地方レベル、いわゆる「同郷」であるということを基準に形成される。彼らは、この集団を通して、祖先に連なる過去の共同体とつながり、移民の体験とその後の苦難の体験を共有する同時代の者となつがる。つまり、生まれ育った共同体の紐帯を離れて、個人、または家族という単位でアメリカに渡ってきた彼らは、このようにして新たな紐帯を形成し、アメリカ社会に参加していったのである。

一世は、自分の子供たちに郷里の伝統を伝えようとするが、アメリカ生まれの第二世代にとっては、「郷里」とは、より一般化された国家レベルのものでしかなくなる。また、それが意味するところも、一世のように日常生活に密着した慣習や生活様式ではなく、取捨選択された抽象的な価値観を中心とするものになる。彼らは、移民の子であることの不利の中で、自分のエスニシティを強く意識し、それを放棄するか、それに忠実でありつづけるかの選択を迫られる。いずれにしても、彼らは、親達の伝統の中の目に見える要素は放棄する。そのため、彼らは、一世が築いた「母国語」を用いる組織から分離して、英語で活動をする同種の組織を形成するようになる。

このような状況は、三世になると一層進んでいく。二世と異なり、三世は、移民の遺産とアメリカ的価値との間の「マージナル」な存在ではなく、はっきりと「アメリカ人」としての意識を持つ。彼らが学ぶ伝統は、合衆国の「建国の父祖」の遺産であり、彼ら自身の血筋につながる過去ではない。しかし、この伝統は、彼らの親である二世が懸命に習得しようとした伝統であり、アメリカ社会が未来に引き継いでいこうとしている伝統である⁽⁵⁾。三世にとっては、祖父の伝統は、「外側」

にあるものであり、認識し、志向すべき対象物なのである。彼らが、エスニシティに基づいて集団を形成したり、集団に参加する場合には、それは、生まれによる集団への所属の域を越え、自発的な決断を伴うことになる。厳密には、ここに、移民集団とは異なる、エスニック集団が成立するのである⁽⁶⁾。

B 移民の同化をめぐる議論と最近の動向

多民族から構成されるのは合衆国だけではなく、多くの移民を受け入れてきたのも合衆国だけではない。それにもかかわらず、多民族の存在と社会、文化の統合をめぐる合衆国で多種多様の議論が繰り返されるのは、合衆国の国家としての成り立ちに関係がある。合衆国と同じように、同じようなグループを受け入れながら社会を形成してきたカナダと比較した場合に、このことが明らかになる。

平和裡に独立を達成したカナダと異なり、北米の13の植民地にいた住民は、独立にあたって、独立派と王党派の間での二者択一を迫られた。彼らは、「アメリカ人」として、新しい国家の一員として新しい秩序の形成に参画するか、イギリス人であり続けるかの選択を迫られたのである。彼らにとっては、自由と平等と民主主義の国家に積極的に参与することが、アメリカ人であることの証明であり、後から合衆国に入ってくる者にもそうしたことが期待される。したがって、移民達は、祖先の伝統とアメリカの体制、生活様式、価値観との折り合いをつけることを求められることになるのである。その際に、折り合うべきものがどのようなものなのか、持ち込んだ伝統のどの程度を放棄し、どの程度を保持することが認められるのか、それが、るつば論をはじめとする議論となって展開されているのである⁽⁷⁾。

初期の移民は、建国の中心になったアングロ-サクソンの社会体制と文化に同化することを求められた。19世紀後半の大量移民時代を迎えると、アングロ-サクソンは優位を保つことが困難になり、そうした認識から、土着主義や移民排斥運動、移民制限論が生じるが、その一方で、20世紀はじめに、るつば論が登場する。この2つの立場は、移民が同化するべきものについての意見は異なるものの、多様な要素がいずれは融合して一つになると考える点では一致している。合衆国の主要なエスニック・人種集団であるアングロ-サクソン、ヨーロッパ系、黒人、ヒスパニック、先住民、アジア・太平洋系をそれぞれAS、E、B、H、I、APで表すならば⁽⁸⁾、前者は、 $AS + E + B + H + I + AP = AS$ 、後者は、 $AS + E + B + H + I + AP = \text{アメリカ人}$ 、と表すことができる。

るつば論は、当時としては画期的な考え方で、アメリカ的生活様式を習得しさえすれば、どのような者も排除されないという信念に基づいている。しかし、現実には、るつばからはじき出されるグループが非常に多く、 $AS + E + B + H + I + AP = \text{アメリカ人} + B + H + I + AP$ という図式でしか表せず、「アメリカ人」とはみなされない者たちは、社会的上昇の機会を制限される。そう

した現実を踏まえて唱えられるようになるのが、文化的多元主義 (cultural pluralism) である。これは、多様なグループが多様性を保持したまま共存し、全体として一つの統合体を形成するという考え方で、モザイク論、オーケストラ論と表現されるものである。図式では、 $AS + E + B + H + I + AP = AS + E + B + H + I + AP$ と表すことができるであろう。しかし、全体の図柄なりトーンなりがWASP偏重である ($AS + E + B + H + I + AP = (AS + E) \times (AS + E + B + H + I + AP)$) という批判から、公民権運動、ブラックパワー以降のいわゆる「エスニック・リバイバル」の中から、新たなモデル、多文化主義 (multiculturalism) が登場する。

多文化主義⁽⁹⁾は、文化的多元主義が唱えていた形が現実のものとなることを希求するものである ($AS + E + B + H + I + AP = AS + E + B + H + I + AP$) が、その実現の手段として、各グループの独自性を一層強化することを考える。各グループが自分達のグループの歴史、文化を学べるようにカリキュラムを改訂して、アフリカ研究、中国研究、ヒスパニック研究といったコースを設置することを要求する動きなどは、その一例である。

上述した通り、合衆国は、啓蒙主義的な個人主義に基づいて形成されてきたので、エスニシティや人種に関しても、それぞれの集団の特異性に注目してそれを保護することよりも、どの集団のメンバーであるかを問わず、アメリカの市民として、等しく扱われることを保証しようとしてきた。つまり、個人の民族的、人種的特異性よりも、人としての共通性に目を向け、ある意味では、個人や社会を非民族化、非人種化することが、民族間、人種間のギャップを埋めることになると考えてきた。しかし、そのような試みは、決して成功してきたとは言えない。

それに対して、多文化主義は、民族間、人種間のギャップを埋めるには、長い間不平等に扱われてきた多くのエスニック集団、人種集団が各々の力を増すことによって、アメリカ社会の中で対等な地位を確保することをサポートするべきであると考えられる。このような主張は、各集団に自民族中心主義 (ethnocentrism) を生む危険をはらみ、アーサー・シュレジンジャーが危惧するような、アメリカの分裂を招く可能性を秘めている。ナッシュは、多様性を認めることが陥りがちな相対主義を克服し、無限の分裂を防ぐための根拠に関して、すべての集団が何らかの合意に達する必要がある、それがアメリカ文化の核にあたると考える。そして、彼は、そのようなアメリカ文化の核として、民主主義の価値を挙げ、すべてのアメリカ人が、ワシントンやリンカーンについて学ぶのと同様に、ハリエット・タブマン⁽¹⁰⁾やイダ・B・ウェルズ⁽¹¹⁾についても学ぶべきであると主張する。つまり、彼は、自民族中心主義的、分裂的なカリキュラム改革を要求する主張に対して、すべての民族、人種、階級、性がすべての民族、人種、階級、性について学ぶべきであると主張するのである。図式で表すならば、 $AS + E + B + H + I + AP = \text{アメリカ人} \times (AS + E + B + H + I + AP)$ と表せる。

最近のエスニシティ研究、人種研究においては、「エスニシティ」とは白人エスニックを意味し、

その他のグループについては、「人種」として扱うのが一般的である。そして、ヨーロッパ系アメリカ人（白人）の間で、エスニック間結婚が進んでいること、そうした結婚によって生まれた子供や孫の世代は自分のエスニシティを自由に選択するようになってきたことを指摘して、アメリカは「脱エスニック」(postethnic) へ向かっていると主張する立場が登場している¹²⁾。

この「脱エスニック」の提唱者であるホリンガーは、「ルーツ」のアレックス・ヘイリーの例をとりながら、「脱エスニック」の社会を説明する。ヘイリーは、母方のルーツを辿ってガンビアに行き着いたが、父方のルーツを辿ればアイルランドに到達したはずである。では、なぜ、彼は父方ではなく、母方を辿ったのか。それは、まだ、アメリカでは肌の色の黒い人間がアイルランド系を称することは、許容されないか、まじめに受け取られないからである。つまり、ウォーターズが主張するような選択の自由は、肌の色の違うものには、必ずしも保証されていないのである。ホリンガーは、白人エスニック間に認められているような選択の自由が、すべての人に保証される社会を「脱エスニック」の社会と名づけ、アメリカは現在の状況を越えて、そのような社会を希求するべきであると主張する。さらに、彼は、現在の状況を、エスニシティと人種の問題に分離して扱うことを嫌い、民族-人種集団 (ethnoracial group) という概念を用い、境界の越えやすさと越え難さという連続性の中で、この2つを捉えようとしている。

この「脱エスニック」社会の中での、エスニシティがどのようなものになり得るかについては、ハーバート・J・ガンズの議論が示唆に富んでいる。彼は、「エスニック・リバイバル」が、1960年代の疾風怒涛に対する白人エスニックの保守的な反応であるという側面を認めつつ、自らの社会的上昇に熱中するあまり子供に関心を払うゆとりの無かった親の子供たち（三、四世）が、親から与えられるはずであった価値を求めて移民の伝統に帰っていったという側面を強調している。三世以降の世代にとって、エスニック・アイデンティティは自明のものではなく、選択することも放棄することもできるものである。そのため、選択可能なエスニック・アイデンティティの中から一つ、ないし複数を選択した場合、その選択を見える形で表明しなければならない。ただし、彼らは、アメリカ人として享受している特典や生活様式を放棄するつもりはない。ガンズによれば、三世以降の世代は、エスニック・アイデンティティには関心があるが、エスニシティに基づく絆や組織など、コミットメントを要求されるようなものにはあまり関心が無い。結果として、彼らのエスニシティの中味は、通過儀礼、祝祭日、祭り、食べ物、登場人物にエスニックな特徴のある映画・テレビ番組などの、エスニックな色彩が濃いにもかかわらず、日常生活で負担にならないものとなる。ガンズは、これを「象徴的エスニシティ」(symbolic ethnicity) と呼んでいる。エスニックな象徴としては、この他にも、国や州の政治的高位に就いた政治家や、祖先の故国の民族運動や、迫害が選ばれることもある¹³⁾。

ウォーターズのエスニシティの選択に関する議論も、ガンズの象徴的エスニシティに関する議論も、白人エスニックに注目した場合には、まったく妥当であるように思われる。しかし、非ヨーロ

ッパ系のグループにとっては、エスニシティは、自由に選択できるものとは程遠く、また、帰属を余儀なくされているエスニシティは、社会的上昇にとって必ずしも有利には働かない。ヨーロッパ系の移民達も同じ道筋を経て現在に至っているという議論も存在するが、ヨーロッパ系の血筋を引く者が他の「アメリカ人」と隣り合わせにバスに乗り、レストランに入れるようになるためには、ボイコット運動や法の改正は必要ではなかったし、ヨーロッパ系の者のアメリカへの入国が全面的に禁止されたこともなかった。その事実一つをとっても、ヨーロッパ系の運命と、非ヨーロッパ系の運命とでは格段の差があることが分かる。非ヨーロッパ系が「アメリカ人」として対等に扱われるようになるために越えなければならないハードルは、決して低いものではなく、個人の努力の積み重ねでなくなるものでもない。

また、黒人、ヒスパニック、先住民、アジア・太平洋系というカテゴリーは、(白人の) 主流文化からなされた分類であることを忘れてはならない。それぞれのグループは、その内に多くの部族や国籍の者を包含しており、そうした個々の下位集団がヨーロッパ系のエスニック集団に相当するだけの独立性を持っている。そして、その中は、ヨーロッパ系のエスニック集団のように、必ずしもエスニック間結婚が進んでいるわけでもなく、利害が一致しているわけでもないのである。これらの集団が一つに結束しているように見えるのは、主流文化との関わりに注目するからである。

次に、こうしたカテゴリーの性質を念頭に置きながら、「アジア系アメリカ人」組織について考察する。

IV アジア系エスニック集団の形成

A エスニック集団の成層

今日のアメリカ社会には、互いに絡み合った2つの階層構造が存在する。階級とエスニシティ(人種を含む)である。合衆国でエスニック集団が一種の階層構造をなしているのは、次のようなプロセスによるものである。

社会の拡大による分業の進展の中で、経済階級が成立するが、合衆国の場合、階級が生じる時期に大量移民時代を迎えている。言語やアメリカの制度に精通していない新来の移民達は、社会・経済体制の下層を補充することになる。また、市民としてアメリカ社会に新しく加わるようになった黒人と先住民も同じような形で、社会の下層を構成するようになる。そのような状態が生まれた当初は、優位に立つものとその他のものの能力や技能には歴然とした格差があったため、そうした階層構造は上層のものだけでなく、下層のものにも受け入れられていた。

この状態は、優位にあるものにとって好都合であったため、彼らはその維持のために諸制度を設け、それを正当化するイデオロギーを生み出す。このようにして、民族-人種集団の成層構造と、人種(差別)主義が成立したのである。

このような構造がひとたび成立すると、同じ層に属している者たちの間に同類のものとしての連帯感、アイデンティティが生まれてくる。故国や言語を共有していることに加えて、優位にあるものから一塊として扱われ、多くの場合、同じ地域に住み同じ学校に通い、利害を共有することによって、特有の世界観や価値を持つようになるためである。彼らは、同じ層に属している人間の成功と失敗を、自分の成功や失敗と受けとめるようになる。そして、成功者は、グループの英雄として扱われ、グループの代表として行動することを期待される。多くの場合、成功は、優位にある者たちの価値と生活様式（主流文化）に同化することによって得られるので、多くの者が成功をおさめるようになると、上層と下層は文化的にも同質的になってくる。しかし、主として上層のものによって引かれた境界線が、下層エスニックの成功者が上層エスニックに混ざることが妨害する。下層エスニックの成功者は、階級的には彼らよりも下位にある優勢集団の底辺の人間から「下のもの」として扱われる⁽¹⁴⁾。個人の努力によって得られた成功は、「ガラスの天井」を破ることはできないのである。このような認識を持ったとき、優位にある民族-人種集団によってある分類に帰属させられている者たちの間から、より主体的な意味を持つ集団が生じるのである。

B アジア系移民の流入

アジア系移民のアメリカへの流入は、19世紀末から20世紀初頭にかけてと、1965年以降とに大きな波が見られる。

最も早くにまとまった数を構成するようになったのは、中国系移民で、1870年の人口調査にすでに「中国系」という選択肢が登場している。しかし、中国系移民に対しては、1882年に中国移民排斥法が制定される。それに替わる労働力として日系移民が増加するが、激化する黄禍論と移民排斥運動の中で、1924年に市民権取得の資格の無いアジアからの移民は全面的に禁止される⁽¹⁵⁾。しかし、米西戦争でアメリカ領となったフィリピンからの移民は、市民権は与えられなかったが、引き続き認められていた。

第二次世界大戦が始まると、連合国側についた中国からの移民は、ごく限られた数ながら受け入れられるようになったが、本格的にアジア系移民が流入するのは、1952年のマッカーラン＝ウォルター法と1965年のハート＝セラー法の制定（西欧偏重の移民割り当て制度の3年後の廃止の決定）によって、こうした差別的な法律が無効化された後のことである。特に、1975年に南ベトナム政府とカンボジア政府が崩壊すると、インドシナからの難民が、移民枠とは別の枠で大量に流入する。

1965年以降のアジア系移民の特徴は、「ボートピープル」のような貧しい者だけでなく、多くの教育程度の高い、専門知識や技能を備えたものを含むということである。つまり、アジアからの移民は、これまでの移民集団のようにエスニシティに基づく社会成層の下層に入り込むのではなく、既存の成層の間に割って入る形で、また1つの移民集団自体が階級的にはかなり幅のある形で、アメリカ社会の中での位置を得たのである。しかし、専門知識や技能を備えてきた者の中には、それ

に見合う職を与えられない者も少なくない。

C 「アジア系アメリカ人」組織の形成

アジア系の移民集団の結束は、たとえば1920年のハワイのプランテーションでのストライキなどにも見られるが、結束を階級闘争という視点からではなく、民族・人種という観点から捉え、社会（優位にあるもの）から一方的に引かれた境界線を主体的に捉え直して、アジア系が結束するようになるのは、1960年代以降のことである。

1960年代という時代は、公民権運動、反植民地闘争と結びついたベトナム反戦運動といった人種・民族意識高揚の時代であったと同時に、1924年の移民法以前に渡米したアジア系集団が二世、三世に達して、アメリカ社会への進出を果たしつつあった時期でもあり、40年に及ぶ移民禁止によって外国生まれの一世とアメリカ生まれの世代とのバランスが逆転した時期でもあった。

60年代の社会運動、政治活動に参加していったアジア系の学生のほとんどは、アメリカ生まれの者たちで、英語とアメリカ人としての文化を共有していた。また、彼らにとっては、「母国」の敵対の記憶は一世にとってほどの重要性は持たない。彼らの間に交流が始まると、雇用差別など、共通の問題や活動目標を持つという認識が生まれた。そうした中で、アジア系としての結束の動きが生じるのである。

アジア系としての最初の結束は、「イエロー・パワー」の名のもとに、1968年に達成された。カリフォルニア大学ロサンゼルス校の「サンセイ・コンサーン」の学生を中心とするものであった。この運動は、フィリピン系を排除する「イエロー」の名称をすぐに放棄し、

さらに、次に用いた「オリエンタル」という名称も、欧米の視点に立つものであるという理由で放棄して、1969年からは、「アジア系アメリカ人」(Asian American)の名称を使うようになる。この「アジア系アメリカ人」という名称を最初に使ったのは、カリフォルニア大学パークレー校の学生達で、彼らは、1968年に、アジア系アメリカ人政治同盟(The Asian American Political Alliance)を結成している。

その後、同種の組織が全国で結成されるようになり、ベトナム反戦や公民権運動にアジア系の視点から加わるだけでなく、大学におけるアジア系アメリカ人研究コースの設置、出版物の発行などを通して、アジア系としてのアイデンティティの高揚のために貢献している。

また、公民権運動の成果としてのアフーマティヴ・アクションが、この時期のアジア系の結束に拍車をかけることになった。アフーマティヴ・アクションは、合衆国の歴史において初めて、集団の権利の保護を意図した政策であり、優遇措置の対象は、マイノリティとして分類される個人ではなくマイノリティ集団である。そのため、マイノリティは、集団を形成して権利を主張しなければならなくなったのである。アジア系の諸エスニック集団は、単独では数が少なく、割当枠の確保が難しいが、アジア系として数をまとめることによって何かのものは得られたので、提携が進

んだ。特に、1970年代のアジア系移民の大量流入は、アジア系に対する職の割当枠を広げ、アジア系のためのプログラムに支出される予算枠を拡大することになったのである。さらに、汎アジア組織は、厳密な人口調査が彼らにより多くをもたらすという認識から、人口調査の質問項目にアジア系のエスニック集団を詳細に記載するように要求し、成功している¹⁶⁾。しかし、アフーマティヴ・アクションの効用については、「ガラスの天井」に到達していた中国系、日系など二、三世に機会を与え、彼らが指導的役割を果たすプログラムへの予算を拡大する結果となったため、頭数の上で貢献した新来の移民・エスニック集団の間には、不満の声も出ている。

いま一つ、アジア系を結束させているのは、暴力に対する防衛の必要である。アジア系のエスニック集団のメンバーは、容貌が似ており、アジア系以外の者が違いを識別するのは困難であるため、あるエスニック集団への敵意がアジア系全体に向けられることになるのである。デトロイトで起こったヴィンセント・チンの殺害事件（1982年6月19日）とその裁判は¹⁷⁾、すべてのアジア系アメリカ人に、どの1つの集団への敵意も自分に対して向けられる可能性があることと、法律が必ずしも公平に適用されるわけではないことを痛感させた。この事件に対する抗議行動は実を結ばなかったが、この苦い経験から、アジア系に対する暴力の撲滅を標榜する組織が、各地で結成されて、成果をおさめている。

V 結びにかえて——汎アジア組織研究の今後の課題

ここまで、移民・エスニック集団が、草の根と全体社会の有効な媒体の1つとして機能してきたことと、エスニック集団の境界線は、社会において優勢な位置にある集団によって決定される傾向が強いことを描写してきた。そして、境界線を引かれて「アメリカ人」から区別（差別）された者たちが、自己防衛と平等の獲得のために、押し付けられた境界線に沿って結束して、成果を挙げつつあることをアジア系アメリカ人の組織を例にとって論じてきた。

アジア系アメリカ人は、ヒスパニックや「アメリカ・インディアン」のように、内部に多様なグループを含みながら、優勢な集団によって、同じように1つのカテゴリーとして扱われている他の者たちに比べて、うまく結束し、社会への効果的な働きかけによって地位を改善してきたとすることができる。その理由として、ロバスとエスピトゥは、人種がおなじであること、全体として下位集団（内部のエスニック集団）間の階級格差が比較的小さいために集団間の利害対立が少ないこと、下位集団間に効果的なコミュニケーションが確立されていること（カリフォルニアなど特定地域に集中して分布していること、出版物の発行、などによる）、比較的豊かであること、などを挙げている¹⁸⁾。つまり、言語、宗教のような文化的な、内面に関わる要因よりも、より外的な要因が、エスニック集団の結束には重要な意味を持つと言うのである。

しかし、1965年の移民法改正以降、汎アジア組織を取り巻く構造的要因は大きく変わりつつある。

汎アジア組織結成を推進してきた二世、三世は、アフーマティヴ・アクションで地位を得て、ますますアメリカ社会への同化を果たしている。将来、優勢集団の側からの境界線の押し付けが弱まり、彼らが「アメリカ人」として社会から受け入れられるようになっていくことが考えられる。そうした場合に、ヨーロッパ系にとってと同様、アジア系にとっても、エスニシティは象徴的なものになる可能性がある。そのような状況に、現在活動する汎アジア組織はどのように対応するのか。

また、1970年代に、これまで移民の少なかった地域から大量に移民、難民が流入することにより、汎アジア組織のなかでのエスニシティのバランスが大きく変化した。組織の中で指導的な役割を演じ、組織を代表して外界に対して発言をする者と、組織の多数を占めるメンバーのエスニシティが異なるということが多々見られる。また、社会プログラムを推進する組織の場合には、プログラムの立案者とその恩恵を受ける者とのエスニシティが異なることが多くなっている。こうした中で、特に後者の間に不満が生じつつある。アメリカでの活動方法に馴染みのない新来の者たちは、人的、物的資源を先着の者に依存せざるを得ず、また、先着の者たちも、効果的な活動のためには新来の者の数を無視することはできないため、今後も効力ある組織であるためには結束を維持する必要があると思われるが、それをどのように達成していくのか。

汎アジア組織が直面する問題は、「防御」、「抵抗」のための結束を越えて、より積極的な意味を持つ組織として、いかに活動していくか、というところに帰着するように思われる。こうした問題に対する個々の汎アジア組織の取り組みを、今後の研究課題としたい。対象としては、「アジア系アメリカ人」を組織の名称の中を含むものに限定し、その構造（エスニック集団の連合体であるか、個人として参加するものであるか、エスニシティの人数バランスと権力のバランス、世代の割合など）と、活動の種類（外界に影響を及ぼそうとする道具的組織であるか、自己充足を目指す表出的なものであるか）に注目して分析する。

また、アジアの各地から集まってきた「中国系」とその子孫が、汎アジア組織で果たす役割について考えていく。

注

- (1) 信仰の自由の規定に関しても、宗教集団が行う信仰の実践の自由を保障するのではなく、個人が自己の信じる場所にしがたって宗教活動を行うことが阻害されることから個人を守るという意味合いのものである。(Katkin, Landsman, and Tyree: 1998, pp. 108-109)
- (2) *The Federalists*, No. 10
- (3) ここでは、ヴォランタリー・アソシエーションを広義に、「メンバーの共通の利益を推進するために形成された、強制や生まれによって参加するのではないという意味で自発的な参加に基づく、国家から独立して自律的に機能する組織」と定義する。Cf. Sills, David L., "Voluntary Associations," in David L. Sills, ed., 1968, pp. 362-363.
- (4) Cf. Niebuhr, H. R. 1929.
- (5) Mead, Margaret, 1943, p. 49.

- (6) ここでは、エスニック集団を、「共通の祖先（真実の、または虚偽の）によって同類であると考え、また、他人からもそのようにみなされる者から成る集団」（Shibutani: 1965, p. 47）、「規範的な行動パターンを共有し、全体社会の中の一部を構成するものとして、一つの社会体制の枠組みの中で、他の集合体と相互作用を行う人々の集合体」（Cohen: 1974, pp. ix-x）、「身体的類似や習慣の類似、植民・移住の記憶から、同じ血筋にあるという主観的信念を持つ人間の集合体」（Max Weber, “Ethnic Groups” (1922), in Sollors, p. 56）と規定する。ウェーバーは、特定のエスニシティのメンバーであることは必ずしも集団形成を招くものではなく、それは、政治的共同体が集団形成に必要な主観的信念を鼓舞するために起こると指摘している。そして、彼は、そのような信念は、メンバーの習慣、身体的特徴、言語が大きく異ならなければ、政治的共同体が消滅した後にも持続する、と述べている（ibid., p. 56）。ウェーバーのこの指摘は、エスニック集団が内発的に自然発生するものであるというよりは、外的な要因から形成されるものであることを示唆するものであり、注目に値する。
- (7) Cf. Greeley, Andrew M. and Gregory Baum, 1977, pp. 18-20.
- (8) 以下の図式については、石朋次（1991年）、19頁～22頁を参考にした。
- (9) 多文化主義をどのようなものかと考えるかについては、文化的多元主義、普遍主義、コスモポリタニズムなどとの混同から、かなりの混乱が見られるが、ここでは、ギャリー・ナッシュ、およびデヴィッド・A・ホリンガーの議論に基づくことにする。Cf. Katkin, 1998, pp. 49-52.
- (10) ハリエット・タブマン（1821～1913）は、メリーランド州で奴隷として生まれた女性で、1849年、北部へ逃亡し、その後は、「地下鉄道」によって300人以上の奴隷を命懸けで南部から北部へ逃亡させている。奴隷解放後も、ニューヨーク州で、困窮した黒人のための施設を運営している。
- (11) アイダ・B・ウェルズ（1862～1931）は、ミシシッピ州で奴隷として生まれたが、解放後、教職に就き、黒人学校の教育改善のための執筆活動を盛んに行うが、1892年に起きたリンチ事件をきっかけに、リンチ撲滅運動のためにも活躍する。また、彼女は、黒人の地位改善のためには、黒人の投票権確保が不可欠であると考えて、投票権運動にも乗り出す。1909年の黒人向上協会の結成メンバーの一人であるが、後にその生ぬるさを批判して脱退している。
- (12) Cf. Waters, 1990, Hollinger, 1995.
- (13) Cf. Gans, Herbert J., 1979.
- (14) 偏見、差別はここに生じると、ハーバート・ブルマーは指摘している（Blumer, Herbert, 1958, p. 5）。
- (15) アジア系移民の制限については、暫定措置としての中国移民排斥法（1882年）が、1902年に無期限延長となり、さらに、1917年に日本、フィリピンを除くアジア地域からの移民が禁止される。日系移民は、1908年の日米紳士協約により、日本政府が移民の自主規制をするということで、一応の合意に達していた。1924年の新移民法は、すべてのアジア系の移民を禁止するものである。

(16) この表は、絶対数が少ないにもかかわらず、他の人種、エスニック集団に比べてアジア系の集団が数多く列挙されていることを示している。Lee, Sharon M., 1993, p. 78.

Comparison of US census classifications of race or colour, 1890-1990

1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970 ^g	1980 ^h	1990
White	White	White	White	White	White	White	White	White	White	White
Black	Black	Black	Black	Negro	Negro	Negro	Negro	Negro or	Black or	Black or
Mulatto	Chinese	Mulatto	Mulatto	Mexican	Indian	American	American	Black	Negro	Negro
Quadroon	Japanese	Chinese	Chinese	Indian	Chinese	Indian	Indian	Indian	Japanese	Indian
Octoroon	Indian	Japanese	Japanese	Chinese	Japanese	Japanese	Japanese	(Amer.)	Chinese	(Amer.)
Chinese		Indian	Indian	Japanese	Filipino	Chinese	Chinese	Japanese	Filipino	Eskimo
Japanese		Other	Other	Filipino	Hindu	Filipino	Filipino	Chinese	Korean	Aleut
Indian				Hindu	Korean	Other	Hawaiian	Filipino	Vietnamese	Asian or
				Korean	Other		Part	Hawaiian	Indian	Pacific
				Other			Hawaiian	Korean	(Amer.)	Islander
							Aleut	Other	Asian	(API)
							Eskimo		Indian	Chinese
							Other, etc		Hawaiian	Filipino
									Guamanian	Hawaiian
									Samoan	Korean
									Eskimo	Vietnamese
									Aleut	Japanese
									Other	Asian
										Indian
										Samoan
										Guamanian
										Other

(17) ヴィンセント・チン（中国系）は、クライスラー社を解雇された白人労働者に、日本人と間違われて殺害された。この事件に対する判決は加害者に非常に寛大なもので、全国のアジア系団体からの抗議にもかかわらず、加害者は投獄されることはなかった。

(18) Lopez, David and Yen Espiritu, 1990, p. 218. 階級、教育水準、年齢、性別と、ヴォランタリー・アソシエーションへの所属率の関係については、Hausknecht, 1962を参照のこと。

参考文献

- Barth, Fredrik, *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference* (Boston: Little, Brown, 1969)
- Blumer, Herbert, "Race Prejudice as a Sense of Group Position," in *The Pacific Sociological Review*, Vol. 1, No. 1, Spring 1958, pp. 3-7
- Cohen, Abner ed., *Urban Ethnicity in the Americas* (London, New York: Tavistock Publications, 1974)
- Gans, Herbert J., "Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures in America," in *Ethnic and Racial Studies* 2 (January, 1979), pp. 1-20
- Greeley, Andrew M. and Gregory Baum eds., *Concilium—Religion in the Seventies, Ethnicity* (New York: The Seabury Press, 1977)
- Hausknecht, Murray, *The Joiners: A Sociological Description of Voluntary Association Membership in the United States* (New York: Bedminster Press, 1962)
- Hollinger, David A., *Postethnic America—Beyond Multiculturalism* (New York: Basic Books, 1995)
- Katkin, Wendy F., Ned Landsman, and Andrea Tyree, *Beyond Pluralism—The Conception of Groups and*

- Group Identities in America* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1998)
- Lee, Sharon M., "Racial Classifications in the US Census: 1890-1990," in *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 16, No. 1, January 1993
- Lopez, David and Yen Espiritu, "Panethnicity in the United States: a Theoretical Framework," in *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 13, No. 2, April 1990
- Mead, Margaret, *And Keep Your Powder Dry: An Anthropologist Looks at America* (New York: William Morrow & Co., 1942)
- Niebuhr, H. R., *The Social Sources of Denominationalism* (New York: H. Holt and Company, 1929)
- Schlesinger, Arthur M., Jr., *Paths to the Present* (New York: The Macmillan Company, 1949)
- Schlesinger, Arthur M., Jr., *The disuniting of America: Reflections on a Multicultural Society* (New York: W. W. Norton, 1992)
- Shibutani, Tamotsu and Kian M. Kwan, *Ethnic Stratification: A Comparative Approach* (New York: The Macmillan Company, 1965)
- Sills, David L. ed. *International Encyclopedia of the Social Sciences* (New York: The Macmillan Company and The Free Press, 1968)
- Smith, Timothy L., "Religion and Ethnicity in America," in *American Historical Review*, 83, 1978
- Sollors, Werner ed., *Theories of Ethnicity—A Classical Reader* (New York: New York University Press, 1996)
- Waters, Mary C., *Ethnic Options—Choosing Identities in America* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1990)
- 石朋次編「世界人権問題叢書2 多民族社会アメリカ」, 明石書店, 1991年